

## 2. 英国のゆうれい

浅見 明 (日本原子力研究所)

「帰朝談を何か」という編集部からの話があり、何でもよいという事であつた。私は41年3月より昨年9月まで2年半、英国ハーウエルの原子力研究所に滞在していた。さて何を書こうかと考えたが、なかなかよい思案が浮ばない。私の仕事の内容については、関係の深い人達にはすでに話した事でもあり、又ハーウエルのリニアック・グループについては、先日のシグマー委員会で紹介したし、来月の研究会でもふれるので、今回は省略したい。

帰朝談でよく書かれるのは、日本と比較した外国の事情と思われる。そして外国の良いところを並べるのが普通で、此のため読む方では、読む前に大体的見当がついてしまい、人によつては又かと思ひだけかもしれない。そこでなるべく手短かに話をしたい。英国にいた当時、私自身此の点いろいろ考えたが、結局二つの点が大変うらやましいと思つた。一つは完全な国民健康保健制度であり、もう一つは定年が普通65才という点である。もつとも前者は経済的事情から多少後退して、最近では老人子供を除き、処方せん料2シリング6ペンス(約110円)とられる。もう一つ書いておきたいのは仕事に関する話である。最近、日本は生産先進国で、所得は後進国である。とよく云われる。経済的観点からの話であるが、私には日本が後進国であるのは政治に於てであるという気がする。というのは、身近な問題である原子力開発で基礎部門が軽視されている事を感じるからである。これは単に予算総額が少ないという事ではない。

比較の話はこれくらいにして、少し変つた話をしたい。心靈術と、ゆうれいの話である。英国に行く前のこと、新聞に軽井沢に住むオランダ人の神父さんの記事がのつていた。その人は地下水のあるところを、ある木の小枝を使うだけで当てる事が出来る。又或時には、電話で話を聞いただけで、全く知らない家の地下水の位置を云い当てた、というのである。これは或有名な作家が座談会で話していた記事であつた。此の話を英国で、何かの折話した事がある。驚いたことに、居合せた何人かは、誰も驚かなかつた。電話の方はともかく、小枝を使つて水を探すのは良く知られている話だそうである。両手を前に出して小枝をのせて歩いて行くと、水の近くに来ると小枝が振動する。これは自分の祖母も昔やつたと一人が云つた。そして話の後彼自身でも試みたがこれは成功しなかつた。彼は良く知られた物理学者である。

もう一つの話。或日研究所の契茶室で、年配の見知らぬ人が話しかけてきた。昔日本人の知人から送られた三枚の浮世絵があるが、書かれている字がよめないで、読んでもらえないかという事で、簡単に引受けた。ところが浅学の私にはこれがとても難しいことがわかつた。それに彼の本当に知りたいのは、絵の由来であるとの事で、その写真を日本に送ることにした。ところで彼はその絵に興味を持つたわけを次のように話した。最近妙な事がよく起り奥さんが気にし出した。一冬に

夫婦で3回づつ風邪を引く。夜中にカリカリと床下で音がするが、調べようとするとう消えてしまう。朝彼の仕事の一つは、暖炉の灰を片付ける事だが、或朝これが全くきれいになつていた。彼も奥さんもやつていない。奥さんは次第に薄気味悪くなり、部屋に掛けてあつた浮世絵の一つが原因ではないかと云い出した。彼自身にとつては、この絵は気に入りのもので、幸運をもたらしてきたものであつたのだが。

日本から戻つてきた絵の説明には、しかしながらゆうれいに関係しそうなものはなかつた。英国にもゆうれいが出る話である。